

## 目次

1. はじめに	世良 迪夫	2
2. 今年度の活動概要	世良 迪夫	3
3. 夜回り活動	長谷川 喜哉	5
4. 北大祭への出店	長谷川 喜哉	7
5. 炊き出し・相談会	中村 ちひろ	8
6. 他団体・機関との連携	世良 迪夫	12
7. 今年度の調査について	南部 葵	14
8. 野宿生活から抜け出すためのお手伝い	佐藤 真愛	18
9. 会計報告	眞鍋 千賀子	20
10. 来年度にむけて	世良 迪夫	21
11. 私と労福会		22
北海道の労働と福祉を考える会 次期役員紹介		37

## 1. はじめに

今日、「北海道に野宿者がいる」という事実を知っている人は少ないのでしょうか。普通の感覚からすれば、雪の降りしきる寒空の下で寝泊りすること自体考えにくいことですし、野宿者達もまた人の目を避けるように生活をしているからです。普段、街を歩いて人とすれ違うとき、少し髪がボサボサな程度の一見した限りでは普通に見える人でも、夜に安心して過ごせる場所が無い人であったりします。彼らのほとんどは、ちょっとした不覚や不況や不運など、それこそ誰にでも起こりうるようなことが原因で、厳しい暮らしをせざるを得なくなっているのです。

野宿者達の深刻な状況になんとかして手を差し伸べたい。そう思う人の集まりによって「北海道の労働と福祉を考える会」は設立されました。野宿者に対してなにができるのか？なにをすればよいのか？わたしたちは常に彼らと向き合い、考えてきました。設立から約7年半、基本は変わらず、野宿者に対して思いめぐらす毎日です。

野宿者が過酷な現状を脱却するには何が必要なのでしょう。食事を分け与えるだけでは、苦しい日々を繋ぐのがやっとなところで、本質的な自立に結びつくことは難しいでしょう。生活保護などで最低限度の生活が確保できるようになっても、何か問題があつて、すぐにまた路上に戻ってしまう人もいます。多くの野宿者がいて、それぞれが複雑な困難を抱えていて、今の支援活動だけでは到底カバーしきれているとはいえません。ただ少なくとも、わたしたちは継続して彼らと関わり、接し、解決策を共に模索していく必要があるのだと、長く活動をする上で感じています。

わたしたちが活動を続けていく中、年を重ねるにつれて、野宿者問題がテレビや新聞で取り上げられる機会も増えてきました。世間でも少しずつ、しかし確実に野宿者問題への関心は高まってきています。その証拠に、当会の活動も多くの方々から支援していただけるようになりました。けれども、未だ路頭に迷う野宿者は絶えることがありません。わたしたちはまだまだこれからも「野宿者がいる」という事実を周りに伝え、さらなる支援を広げ、いっそうと深く考えていく必要があるのです。

## 2. 今年度の活動概要

前年度から引き続き、2006年度は主として炊き出し・夜回り・付き添い同伴による野宿者の自立支援活動を行いました。主な活動概要は図表のとおりです。

活動の詳細は各章で述べるとして、今年度で新たに行った活動や会の変化として、北大祭への参加・代表の交代・活動の広がりの3つが挙げられます。

### 2.1 北大祭への参加

支援活動をするにはどうしてもいくらかの資金が必要です。これまでは会の収入のほとんどが会費・寄付・助成金という、どの程度収入が得られるかどうかもわからない不安定な資金に頼りきりでした。

そこで、活動資金を集めるための事業の第一歩として、6月1日～4日にかけて、北海道大学で開催された学校祭に焼きおにぎり屋を出店しました。

スタッフや資材は不足していましたが、炊き出しで何度かおにぎりを大量に作った経験のおかげもあり、好評を博していました。また、販売と同時に当会の活動を伝えるビラや看板を設置したことで、学生や市民へアピールすることもできました。

結果として、収益自体はさほど得られませんでした。普段接することのない方々にも活動をアピールできたのは大きな収穫でした。

### 2.2 代表の交代

かねてより入院加療中でした椎名代表が、本年度10月31日にご逝去されました。それに伴って、木下副代表が代表代理として就任し、次年度より正式に代表として就任いたします。

椎名代表がこれまで育んできた会の活動を大切に、これからも野宿者の人々に対する熱意を引き継いで活動していきたいと思っております。

### 2.3 活動の広がり

野宿者自立支援活動を続けていると、数年前と比べて世間の野宿者問題に対する意識が少しずつ高まっているように感じられます。そのような中、本年度さらに他の支援団体とのつながりの輪を広げることができました。

他団体との炊き出しや夜回りに関する意見交換や、大阪府立大学 社会福祉調査研究会によって行われた全国調査への協力、厚労省によるホームレスの実態に関する全国調査の札幌地区調査も請け負いました。

当会が引き金となった形で、北見・函館・苫小牧でもホームレス自立支援活動が活発化してきています。ホームレス自立支援ネットの活動も現在着々と進行中で、次年度以降もさらに支援が広がっていくことでしょう。

表 2-1 : 2006 年度活動カレンダー

5/17	札幌市との意見交換会
5/27	炊き出し・総合相談会
6/1~4	北大祭
6/18	第1回ホームレス学習会
6/24	炊き出し
6/29	第2回ホームレス学習会
7/5	第3回ホームレス学習会
7/9	居宅生活者へのはがき送付
8/26	炊き出し・法律相談会
9/19	札幌市との意見交換会
9/20	居宅生活者へのはがき送付
9/22	拡大夜回り
9/23	朝回り
9/30	炊き出し・総合相談会
10/21	朝回り
10/28	炊き出し
11/11	ボランティアまつりでの労福会紹介
12/2	炊き出し・法律相談会
12/7	札幌市との意見交換会
12/19	居宅生活者への年賀状送付
12/23	クリスマス朝回り
1/20	炊き出し・聞き取り調査
1/26	ホームレス聞き取り調査
1/27	ホームレス概数調査
3/10	総会

※ その他 毎月 第一、三、五 金曜日に夜回りを実施

### 3. 夜回り活動

今年度も昨年度に引き続き、定期的に夜回りを行いました。これは日常的に野宿者と関係をもち続け、また健康面などで緊急な処置が必要な方の対応をするという目的で、2001年の秋から続けられている活動です。今では、炊き出しや生活保護申請の付き添いと並んで、この夜回りが会の活動の中心になってきたといっても過言ではないでしょう。

まず、具体的に夜回りとは、毎月第1、3、5金曜日の20時に三越地下鉄連絡口前に集合し、札幌駅、大通、狸小路など野宿者の多い地域を中心にスタッフがまわり、缶コーヒーやおにぎりを配って野宿者とお話をするのです。次に行われる炊き出しの案内もビラをまくなどして夜回りのときに行いました。また、参加したスタッフの人数によって、数班に分かれて各所をまわりますが、各スタッフにはできるだけ毎回同じ地域をまわってもらうようにしています。そうすることで、同じスタッフが同じ野宿者とかかわりを持ち続けることが可能となります。最初は声をかけてもあまり反応してくれず、全然相手にしてくれない方もいましたが、だんだん話がはずむようになりました。また、スタッフのことをいつも決まった場所で待っていてくださる方がいたり、顔見知りのスタッフの顔を見ると向こうから声をかけてきてくれる方もいます。定期的にお互いに顔を合わせることで、当会と野宿者の間の信頼関係が強まったことを実感する機会が多くなったことは、スタッフにとってもうれしいことでした。さらに、夜回りの中で生活保護申請の付き添いの約束に結びつくケースがあったことや、炊き出しの会場で顔見知りのスタッフの顔を見つけて、生保申請の相談を持ちかけてくる方がいたことなど、定期的に夜回りを続けた成果は大いにありました。

次に、今年度は拡大夜回りという名前で、いつもの夜回りでは回らない札幌郊外の小樽、新札幌、豊平川河川敷などに行きました。昨年度から当会の中では、札幌の郊外でも野宿者が増えているということは話題になっていましたが、その方々に対する支援の第一歩にしようということが目的です。結果として、小樽、新札幌、豊平川河川敷でそれぞれ1人の方に会うことができました。しかし、当会のことを知らない人ばかりなので警戒され、あまり話をすることはできませんでした。そこで、何か困ったことがあったら会の電話に連絡してくださいとあって、会のことを書いたビラを渡してきました。今後はこのような地域にもできるだけ多くに出向いて、積極的に関係作りをしていくことが今後の課題として挙げられます。

そして、来年度に向けてということで、いくつかあげておきます。まず第一に、メーリングリストの活用です。今年度は、夜回りのあと、会って話を聞くことができた人数のみをメーリングリストで流していましたが、参加者の感想や気になったことなども、メーリングリストを使って流し、参加したスタッフ以外にも情報の共有ができるようになればいいと思います。また、夜回りの記録の徹底ということもあげられます。今年度も、夜回り

のあとにスタッフが集合して反省会を行い、その日話すことができた野宿者の人数のみを記録していましたが、記録するノートを活用しきれていませんでした。今後は、どこで誰と話したか、どのような人がいたか、または、夜回りの感想など書くようにしていけばよいと思います。さらに、夜回りで配るものの中身や、上でも少し述べたように見回る地域をどうするのかなど、来年度に向けて考えていかなければならない点は数多くありますが、定期的に行われている夜回りを来年度も続け、野宿者の方々と近い労福会であり続けたいと考えています。

#### 4. 北大祭への出店

6月1日から4日にかけて北大の構内で行われた大学祭に、当会で出店しました。この大学祭への出店という企画は7年間の活動の中では初めての試みです。商品は、当会らしく炊き出しに近いものを出そうということで、いろいろ試行錯誤して8種類の味の焼きおにぎりということになりました。この出店企画の目的は、自分たちでも会の活動資金集めをしようということと、多くの人に当会の活動、札幌の野宿者の実態を知ってもらおうという当会の宣伝のためです。宣伝のためには、夜回り・炊き出し・生活保護同伴・学習会・人数確認調査などの活動を紹介する大きなポスターを作成して店の前に貼り、会報や昨年度の総会の資料は道行く人が自由に持ち帰れるようにして店の前に置きました。当日は雨が降ったり、人手が不足していたり、大量の焼きおにぎりを作って売るという慣れない作業の連続だったり、いろいろと苦労することもありましたが、結果としてこの企画は成功しました。ひとつは、わずかではありますが利益を出すことができたことです。これは当会の活動資金として使います。もうひとつは、当会の宣伝ということについて、予想以上の効果があったことです。注文を受けてから焼きおにぎりを渡すまでの間に、たくさんのお客さんにポスターを見ていただき、その中には興味があるから活動内容をもっと詳しく教えてくれとスタッフに聞いてくる方もいました。店の前を歩いていく人の中にも、立ち止まって熱心にポスターを読む方もいました。配布するために用意していた資料もすべてなくなりました。また、「以前に野宿をしていた友人が、生活保護申請の際に当会に世話になったから、ほんの気持ちだけどとっておいて」と言ってお金を置いていく人、「活動のために使ってくれ」と寄付金を置いていく人もいました。これだけ宣伝効果があるのなら、もっと工夫すべきだったと反省しています。例えば、配布する資料も会報や総会資料など会員向けのものではなく、対外的に活動を紹介するビラを作るとことや、買ってくれたお客さんにはそのビラといっしょに商品を渡すなどすればさらによかったなと思います。大学祭というお祭りムードの中で、これほど多くの方が当会に関心をもってくれたことは、正直なところ意外でしたが、このように外に向けて当会の存在、野宿者の実態をアピールすることも大切であるのだなと感じさせられました。来年度もこの企画をやるかは未定ですが、会の活動資金を集める機会や、対外的な宣伝の機会を設けることは必要であると考えています。

## 5. 炊き出し・相談会

当会では年に数回、札幌市民会館で各種相談会をかねた炊き出しを行っています。今年度は、5回の「炊き出し・総合相談会」を行い、また2回の「炊き出し・法律相談会」も行われました。以下で、(1)相談会の概要、(2)相談会の意義・目的、(3)来場者とその推移、(4)相談会の内容、の順でこれらの相談会について総括していきます。

### 5.1 相談会の概要

今年度の炊き出し・相談会実施概要は下記の表 5-1 のとおりです。今年度は計 7 回の炊き出し・相談会を実施いたしました。

表 5-1 : 2006 年度 炊き出し・相談会 実施概要

日時	来場者数 (人)	特記事項
5 月 27 日 (10:00~15:00)	65	札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催・総合相談会 健康相談 18 件、精神保健相談 1 件、法律相談 0 件、 就労相談 2 件、生活・福祉相談 2 件
6 月 24 日 (18:00~21:00)	63	札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催 5 月 27 日実施健康診断の結果返却
8 月 26 日 (18:00~21:00)	60	法律相談会 札幌司法書士会と共催
9 月 30 日 (10:00~15:00)	72	札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催・総合相談会 健康相談 21 件、精神保健相談 0 件、法律相談 0 件、 就労相談 3 件、生活・福祉相談 7 件 ビンゴ大会の実施
10 月 28 日 (18:00~21:00)	68	札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催 9 月 30 日実施健康診断の結果返却
12 月 2 日 (18:00~21:00)	64	法律相談会 札幌司法書士会と共催
1 月 23 日 (18:00~21:00)	64	聞き取り調査実施

### 5.2 相談会の目的・意義

総合相談会は、野宿者に限らず生活に困っている人々のための場です。来場者に少しの

間だけでも「暖かくくつろげる場」を提供し、「スタッフとのコミュニケーション」をとる中で信頼関係を築き、「自立への可能性を探る手伝い」をすることを目的として行われます。また、市民に当会の活動や野宿者の存在を知ってもらう良い機会にもなります。

今年度も、おおむねこの目標は達成できたと思います。しかし、今後も野宿者と接していく中で、野宿者のためになるにはどのような支援をしていけばよいのか、さらに考え続けていかなければなりません。

### 5.3 来場者とその推移

今年度の来場者数は表 5-1 (p. 8) のとおりで、毎回ほぼ 60 人台で 1 年を通して大幅に増えたり減ったりすることもなくほぼ一定でした。昨年まで見られた減少傾向も今年はほとんど見られませんでした。その理由として、札幌中心部からの野宿者の減少あまりなく、野宿者の移動が少なかったからと考えられます。来場者には、昨年同様古くから野宿をしている人や、一度野宿生活を脱した後、再び野宿するようになった人が多く見受けられるようです。また、今年度も昨年度に引き続き、年齢の若い 20~30 代の来場者の数が多くなってきています。

12 月の炊き出しでは、来場者に混じって手配師のような人が来ており、野宿者に当会のスタッフと偽って声をかけていたようでした。そこで今後は、そのような人は当会とは無関係であること、当会では仕事の斡旋はしていないことを改めて野宿者に知らせなければなりません。

### 5.4 相談会の内容

#### 5.4.1 食事・物資の配布

今年度も、おにぎり、お弁当、豚汁などの食事や、タオル・歯ブラシ・使い捨てカイロ・缶詰・カップ麺・石鹸・シャンプー・靴下・カミソリ・風呂券（北海道公衆衛生浴場協会が発行しているもので、同協会に加盟している銭湯ならどこでも利用できる回数券）・衣類などを来場者に配りました。この他に、各テーブルごとにチョコレートや飴などのお菓子や、みかんなどの果物も置きました。これは、日ごろあまり甘いものを口にする機会の少ない野宿者に喜ばれていたもので、今後も続けて行きたいと思います。来年度以降も、野宿者のニーズや季節に合わせて、食事や物資を配布していく予定です。

#### 5.4.2 生活相談

相談会の会場では、来場者とのコミュニケーションを図る事も兼ねて当会のスタッフが

来場者に対して最近の様子を聞いてみたり、世間話を持ちかけたりして話しかけていきます。その中で、気軽に話ができるような雰囲気を作り、来場者が問題や悩みを話しやすくするように心がけています。ちょっとした雑談から入り打ち解けて話しやすい雰囲気になると、当事者が抱えている悩みを相談してくれ、そこからその問題の解決のためにはどうすればよいのか一緒に模索していくことができます。その中で、自立への意欲が芽生えることもあります。

今年度は、札幌司法書士会との共催で行われた炊き出し・法律相談会が2度あり、また他の炊き出しにも常時ボランティアとして司法書士の方が参加していました。そのため、これまでよりも法律面に関する相談に関しては解決しやすい環境ができました。また、相談会では希望者の生活保護申請にスタッフが付き添うこと（付き添い同伴）も受け付けています。今年度は、1回の相談会に当りだいたい3~10名の方が希望されました。昨年同様、それ以前に比べると相談会の場で受け付けた同伴件数は減少しています。これは、夜回りの場でも同伴を頻繁に受け付けるようになったこと、またその他に再び野宿するようになった人の割合が増え、野宿者自身が再度の生活保護の申請をあきらめてしまっているという現状もあります。そのために、今後は生活保護の申請までではなく、それ以後の野宿生活を脱した後のフォローの必要性が改めて認識されるようになっていきます。今後、居宅に移った後のフォローをどのように、どこまで行っていくのか検討し実行していくことが当会の急務となっています。

### 5.4.3 散髪

相談会の場では、ボランティアの理容師の方の協力によって来場者の散髪も行っています。毎回20名程度の散髪を行っていただき、それでも時間の関係で毎回希望しても散髪できない人がでるほどの好評を博しています。散髪の待ち時間や、散髪している間にも来場者の方と話をすることができ、コミュニケーションを深める良い機会にもなっています。

### 5.4.4 催し物

9月の炊き出しでは、来場者との交流の一環として「ビンゴ大会」を開きました。昨年同様会場は盛り上がり、多くの来場者に楽しんでいただけたようです。いつもは、食事をし終わるとすぐに帰ってしまう来場者が少なからずいますが、ビンゴ大会を行った時にはそのような人も少なく、多くの人が会場に長時間滞在しており、スタッフとのコミュニケーションを深める機会を増やすこともできました。今後も、楽しく良い雰囲気をつくることのできるような企画を考え行っていく予定です。そして、このような催し物をきっかけとして、より密に来場者と関わっていき、自立の手助けがしやすくなっていければよいと考えています。

#### 5.4.5 他団体との協力

今年度も、昨年度に引き続き他団体と協力して相談会を行うようになりました。5、6、9、10月の炊き出し・総合相談会はNPO法人ハンドインハンドとの共催で行われ、食事の提供や衣類の配布といった点で充実させることができました。

また、8月と12月には札幌司法書士会と共催で炊き出し・法律相談会が行われました。法律に関する専門家の方が参加したために、通常よりも法律関係に特化した相談会となりました。他団体と協力して行うことで活動の広がりにもつながり、またそれぞれの得意分野をもつ団体と協力して行うことで、より多くの来場者の様々な希望に添うことができるようになります。今後も、このような団体と一層協力していき、一人でも多くの野宿者の自立の手助けができるようになりたいと思います。

#### 5.4.6 札幌市との共催

5、6、9、10月の炊き出し・総合相談会はハンドインハンドとの共催であるとともに、札幌市との共催でもあります。5、9月には、区役所職員による生活・福祉相談や、ハローワーク職員による就労相談、札幌弁護士会による法律相談、札幌こころのセンターによる精神保健相談などいつもより幅広い分野での相談が行われ、加えて健康診断（検尿・血圧測定・血液検査・X線検査）も行われました。そして、6、10月にはその健康診断の結果が配布されました。なお、来年度も4回、同時期に札幌市との共催を行う予定です。今後も、市との共催を続けていく中で、野宿者と行政との隔たりが緩和できることを目指していきます。

## 6. 他団体・機関との連携

今年度も当会のスタッフ以外の方々に支えられ活動を進めてきました。物資の提供や寄付、活動の支援など様々な援助をしていただいた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。昨年度に引き続き、今年度は野宿者の支援団体との関係がより広がった年であったといえます。ここでは、今年度の他団体や機関との連携について報告していきます。

まず、今年度は大阪府立大学 社会福祉調査研究会の居宅に住んでいる元野宿者を対象とした聞き取り調査に協力いたしました。詳しくは次章「今年度の調査について」で述べられています。札幌地区で調査の対象となる方を労福会から紹介できたのは、これまで積み重ねられてきた野宿者とのコミュニケーションのおかげであるといえます。今後も、野宿者や居宅生活者の実態を把握するために、このような調査活動を行っていく必要があるでしょう。

また、在札の支援団体の「NPO 法人ハンド・イン・ハンド」とは、毎年札幌市との共催で行われる「炊き出し・総合相談会」における民間サイドのパートナーとして共に活動を進めてきました。今年度はお互いの得意分野を活かし、労福会では会場設営や付き添い同伴、ハンド・イン・ハンドには食事の提供や衣服の配布などと分担して、前年度よりもスムーズに炊き出し・総合相談会を運営することができました。来年度以降も連携を深めることで、より充実した活動としていきたいと考えています。

さらに、昨年度から始まった「なんもさサポート」とも引き続き協力し、より野宿者に合った自立支援をすることができました。今年度、当会を経由してなんもさサポートの就労支援を受けられた野宿者は7名いらっしゃいました。近年は稼働能力の十分にある若い野宿者が増えてきていることもあり、そのニーズに応じていくためにも、なんもさサポートとの連携をますます深めていく必要があります。

他にも、当会の活動に力を貸して下さった各種専門化・諸団体について報告します。「札幌司法書士会」の有志の方々にも当会の活動に積極的に参加していただいています。特に、8月と12月には当会と札幌司法書士会との共催で法律相談会を成功させることができました。野宿者の中には借金等の問題を抱えている方もおり、法律の専門家との連携は支援を効果的なものにすることができます。また、札幌西区の弁当屋である「山の手屋」には法律相談会の際に食事の準備をお願いしました。毎回、格安な値段で弁当を用意していただいている、炊き出し来場者にたいへん好評を博しています。「北海道民主医療機関連合会(民医連)」さんからも、炊き出しに医療の専門家を紹介していただくなど、古くから当会の活動にご協力いただいております。また、炊き出しの散髪コーナーにも毎年、理容師の方がボランティアで来ていただいております。法律相談、食事の提供、診察、散髪などを受ける機会の少ない野宿者にとって、これらの支援はたいへん貴重で、来年度以降継続して各種専門家の方々と協力していけることを期待しています。

最後に、行政機関との関係です。今年度も当会と札幌市とは、年4回の「総合相談会」

の共催(5・6・10・11月)、ホームレスに関する実態調査の受託・実施(1月)、意見交換会・打ち合わせの実施を行い、昨年度同様の協力関係を継続していくことができました。しかし、こうした連携を取りつつも、札幌市を含め行政機関の野宿者自立支援に関して当会の意見はまだ十分に反映されているとは言えません。区役所の窓口レベルにおいてさえも、いまだに生活保護申請を希望される方が厳しい対応を受けることは少なくありません。また、生活保護受給後の対応などもこれからの課題です。これらは、野宿者個人や支援団体のみが抱え込む問題ではなく、行政も考えていくべき問題であることは言うまでもありません。ただ、よりよい支援のあり方を行政に提示することは支援団体の責任でもあり、来年度以降も当会の意見・要望をより積極的に札幌市や道、国に対して訴えていく必要があるでしょう。

## 7. 今年度の調査について

野宿者の自立支援するにあたって、当事者の実態を把握することは、支援のあり方を誤らないためにも重要なことだといえます。当会の活動を通じて実態を把握する手段は、大きくわけて2つあります。1つは、「生活保護申請の付き添い」や「夜回り」など、通常の支援活動を通じて当事者の声を聞くこと。もう1つがこの調査にあたります。

調査は、札幌にいる野宿者の全体像をあきらかにするために行われるものであり、普段、あまり労福会と接することのない人たちの様子を把握するさいに役立ちます。今年度は、居宅生活後の元野宿者を対象にした訪問聞き取り調査と札幌市内の（野宿者）人数確認調査が行われました。

### 7.1 居宅生活に移られた元野宿者調査

前年度の総会でも議論にあがりましたが、「脱野宿」の問題は、決して居宅生活に入れば解決されるものではありません。生活保護などで最低限の収入は確保されるものの、そのお金をどう使うかといった金銭管理の問題、人間関係のつながりの薄さ、地域に溶け込めない、就職先も見つからずに生きる希望を失いかけているケースなど、「脱野宿」後のフォローアップを自立支援の過程でしっかり考えない限り、再び野宿に舞い戻るケースが少なくありません。同じような危惧は、全国の野宿者支援団体でも持っており、2006年9月、大阪で精力的な全国野宿者調査を行っている大阪府立大に付属する研究グループから、「ホームレス自立支援法改正を前に、全国で居宅生活をしている元野宿者の人たちの実態を調査したい。ぜひ札幌でも協力してほしい」と依頼がありました。そこで、労福会と大阪から10名ほど来られた研究者が分担、協力し合い、10月と11月に計7日間、聞き取り訪問調査を行ないました。そのうち当会のみで聞き取り調査を行なったのは9ケース。この9ケースは生保申請の付き添い等で当会とつながりのある当事者に、調査趣旨・内容を説明した後、了解をいただいたケースです。以下表7-1 (p.15) にその一部結果を掲載しました。

今回の調査対象者は、年齢では50代半ば以上、野宿・居宅生活期間では、1年未満のケースが多くいました。健康状態については、全員が何かしらの症状を訴えており、半数を超える5ケースが体の状況を理由に就職できないままです。仕事に関しては、「働きたい」意欲はあるものの、年齢がネックになっているケースもみられるほか(ケース3,7,9)、「ケースワーカーの訪問前日には、『仕事を探さなければ』というプレッシャーがかかる」(ケース5,6)と思いつめる様子や、就労したケースであっても「仕事に就いたが、毎日仕事があるわけではなく、寮費や食費を差し引かれると借金になるので辞めた」(ケース1)という事例もあり、就労できる労働条件がよくない現実がみえてきます。

日常生活の過ごし方について、やはり人や地域とのつながりを構築する難しさが結果にあらわれています。民間支援事業所「なんもさサポート」が所有する同一アパート（元野宿者が多く入居）に入居しているケース6からケース9まででは、ある程度の「近所付き合い」はみられるものの、他のケースでは「近所付き合い」は全くみられません。「寂しいとき、退屈なときの気晴らし」については、1人で飲酒、テレビをみる、散歩が多く、「寂しいから外でお酒を飲む。以前は収入の半分が酒代だった」（ケース3）という声さえもありました。この結果から1人で行動する傾向が強いとわかります。さらに「地域の人たちとの交流」については、「今はないがやってみたい」と答えたのが4ケースあり、地域の人たちとのつきあいを望んでいる様子も伺えます。そのなかで「自分からは言えないが、周りから声をかけられたら、やってみたい」（ケース1,2）という気持ちや、逆に「仕事がないので生活リズムが違い、交わることができない。むしろ自分がまわりに気をつけてしまう」（ケース3）、「元野宿者以外の人たちとつきあう気持ちの余裕がない」（ケース6）といった、現在の状況が強く反映して「望まない」と答えたケースもみられます。また、「困ったときに相談できる人」は、家族・知人の3ケースに対し、支援者（「なんもさサポート」を含む）という回答が4ケースあり、居宅生活後の最後の拠り所として、支援グループの存在が大きいことがあらためてわかります。

さらに今回の調査では、身体に障害があるケース（ケース4,8）の実態もあきらかになりました。「現在の収入でのやりくり」では、「ぎりぎり」と答えたなか「小児麻痺で右足首が動かないため、病院などタクシー移動がどうしても多くなり厳しい」（ケース8）や、経済的な負担のレベルとして「脳梗塞で左半身が不自由。雨の日は傘がさせずタクシーを利用せざるをえない」（ケース4）、日常生活上の苦悩として「入居できるアパートには階段しかないが、車イス生活なので辛い」（ケース8）、「冬道は怖くて、杖をついて買い物に行くのがたいへん」（ケース4）、「買った物を手で持てないので、店員にリュックに入れてもらうが、周りから迷惑そうな顔をされる」（ケース4）といったような精神的に疲弊してしまいかねない現実がみえてきます。特に「食事を作れないのでカップ麺やお酒に頼っていると14kgも痩せてしまい、栄養失調と診断された」（ケース4）のように、金銭支給だけでは、自立どころか健康維持さえできない事例もあります。このようなケースの問題は脱野宿のさいに限らず、生活保護制度の全般に通じる問題も含まれており、当会は今後、いかなる支援ができるのかじっくり話し合っていく必要があります。

以上のように、健康上の問題や就職の厳しさを抱えながら、孤独さを感じ、ケースによっては生活が困難にいたるなど、これらの要素が互いに関係しつつ、自立を阻んでいるのが実態のようです。今回はわずか9ケースのみの簡易的な分析に過ぎなかったのですが、それでもなお、これだけの課題がみえてくるところに、自立支援の難しさをあらためて実感させられたのでした。全ケースの詳細な分析については、全国データとも比較しながら、ただ今、大阪府立大を中心とする研究グループで行われているところです。結果がわ

かり次第、会報などを通じてお知らせいたします。

表 7-1 : 居宅生活者実態調査結果(全 99 問中 13 問抜粋)

	性別	年齢	健康状態	収入	家計のやりくり	最長職	野宿期間	居宅期間	気晴らし	近所付き合い	地域交流	相談できる人	仕事
1	男	56	高血圧・手のしびれ	13万円就労	まあまあできている	溶接	6ヶ月	1年	元野宿者と会う	なし	やってみたい	ボランティアの人	働くほど借金が増えたため辞職※
2	男	57	体全体の痛み	13万円生保	まあまあできている	とび職	2年半	2週間	テレビ・散歩	なし	やってみたい	ボランティアの人	体が悪くて仕事不可
3	男	63	腰痛	7万9千円	ぎりぎり	調理師	10日間	5年	外で飲酒	なし	接点がない	兄に連絡	年齢的にない
4	男	51	半身不自由・栄養失調	16万円生保	できている	大工	10日間	3ヶ月	家で飲酒・散歩	ない	やってみたい	昔の仕事仲間	半身不自由で不可
5	男	62	うつ病・腰痛	12万円生保	できている	機械作業員	6ヶ月	6ヶ月	家で飲酒・散歩	ない	ない	いない	怪我と人間関係で辞職
6	男	59	ひざ痛	11万円生保・1万円就労	ぎりぎり	土木・建築	2ヵ月	10ヶ月	散歩	頻繁に同じアパートの住人	ない(気持ちの余裕なし)	野宿者の知人	アルバイト
7	男	58	うつ病・胃・足の痛み	13万円	まあまあできている	塗装	1週間	1ヶ月半	テレビ	あいさつ程度	やってみたい	なんもさサポート	足が悪い・年齢的にない
8	男	48	足腰の痛み(車イス生活)	14万円生保・障害年金	ぎりぎり	販売職	2ヶ月	2年	家で飲酒・会話	時々同じアパートの住人	ある	なんもさサポート	障害(小児麻痺)のため不可
9	男	55	腰肩の痛み	11万円生保	できている	塗装	2週間	7ヶ月	テレビ・散歩	同じアパートの住人	ない	いない	(年齢上)短期間のアルバイト

※ 調査当時(ケース1)は別の仕事を見つけ、月収13万円で就労中

## 7.2 人数把握調査について

今年度の人数把握調査については、厚労省の「ホームレスに関する全国調査」の札幌地区を委託されるというかたちで行なわれました。2007年1月27日早朝4時、28名の調査員を動員して、目視でカウントする方法で人数調査を実施しました。調査員は、当会のメンバーを中心に、北海道大学、北星学園大学の各学生、札幌市職員によって構成され、札幌駅、大通、中島公園、すすきの、琴似、宮の沢、麻生、白石、新札幌、円山公園などを13班に分けて回りました。

今回は、事前に夜回りなどを通じ、何時ごろ、どこにどれだけの野宿者がいるのか具体的な情報(〇〇ビルの螺旋階段の踊り場におよそ〇名)までをきっちりリサーチし、札幌駅のような出入口が複数ある大きな建物では、おおまかな野宿者の移動の流れをつかんだ

## 7. 今年度の調査について

うえで、調査員を配置するなど、これまでの人数調査で見逃していた部分の野宿者をかなり把握できたと思っています。なお、結果については、未だ、厚労省での分析が終わっていないため、結果がまとまり次第、こちらも会報などを通じ、皆様にお知らせいたします。

## 8. 野宿生活から抜け出すためのお手伝い

脱野宿を実現する方法のひとつとして、生活保護の申請が挙げられます。野宿者のなかには「今の厳しい状況をどうにかしたい、でも、自分一人ではどうにもできない」という人が少なくないはずです。生活保護は、辛い路上生活から抜け出したいと思っているそんな方々の助けになります。しかし、実際には、区役所に一人で足を運ぶのを躊躇してしまったり、生活保護制度について詳しく知らなかったり、あるいは、全く知らなかったりする野宿者が多いのが現状です。当会では、そのような方々に生活保護についての説明を行っています。そして、もし生活保護を希望するようであれば、生活保護同伴という形で当会のスタッフが付き添い、行政窓口へ申請の相談に行っています。同伴は、付き添うことによって、脱野宿をするための第一歩を踏み出そうとしている野宿者の不安や悩み、心細さなどをサポートすることを目的としています。

現在、生活保護を受ける際に、「定まった住まい」がなければ、申請を認められるのはたいへん難しい傾向にあります。では、住まいのない野宿者が生活保護を受けるためにはどうすれば良いのか。それには、主に次の5つの方法があります。第一に、健康上の問題がある場合は病院に入院し、病院を一時的な居住地として申請を行い、治療後に居宅へ入居する方法。第二に、即就職が可能な場合は、就労支援施設（明啓院など）での就労支援を受ける方法。第三に、高齢であったり、即就職に結びつかない場合は、救護施設での一時的な保護を受け、病院に入院する場合と同様に、そこを居住地として申請を行い、その後、居宅を探し入居する方法。第四に、保証人や前金がなくとも借りられるアパートを自ら探して入居し、そこを居住地として申請を行う方法。第五に、昨年度からはじまった「なんもさサポート」による支援を受ける方法です。また、例外として、今年度は区役所からダイレクトに仕事が紹介されたということもありました。

今年度の生活保護申請同伴の結果は表 8-1 (p. 18)の通りです。

表 8-1 からわかるように、今年度は昨年度に比べて、同伴件数の大幅な減少がみられます。これには、二つの理由が考えられます。一つ目は、野宿者の生活保護への認識の変化です。これまで、当会では、たくさんの野宿者を脱野宿のために生活保護の申請へと導いてきました。しかし、生活保護を受けていても、仕事がなかなか見つからず、ついには生活保護を打ち切られ、再び野宿生活に戻ってしまうようなケースが少なからずあります。このような経験をした野宿者は、再び生活保護を受けるということをあきらめてしまう場合が多いのです。そして、「生活保護は厳しい」という考えが野宿者の間で広がり、申請希望者が減少したと考えられます。二つ目は、当会に

おける宣伝不足です。以前は炊き出しの際に、生活保護についての説明を行っていましたが、今年度は希望者に説明した程度で、あまり力を入れていませんでした。当会で、宣伝をもう少しやっていたならば、一つ目の減少理由にあった生活保護についての認識もよい方向に変えられたかもしれません。また、今年度は、生活保護の申請を行う際に、救護施設よりも就労支援が優先的に勧められることが多いように感じました。このことは、図表でも、全体数が減少しているにもかかわらず、就労支援の数だけほとんど変わっていないという形で現れています。

同伴を行っていく上での課題もあります。まず、同伴を請け負うスタッフの偏りです。今年度は同伴希望者が少なかったこともあり、対応しきれないという事態にはなりませんでしたが、同伴はスタッフにも大きな負担がかかるものです。今後継続して同伴活動を行うためには、できるだけうまく分散して請け負っていかねばなりません。

また、同伴後の報告については、当会のメーリングリストによって小まめにやり取りされていたので、スタッフの間で情報を共有することはできましたが、同伴報告書による同伴の詳細について十分とは言えず、今後徹底していく必要があります。

生活保護を受けたからといって、そこで完全に脱野宿が実現するわけではありません。生活保護を切られて、再び野宿してしまう人も少なくないからです。当会では居宅生活に移った方に、年賀状の送付なども行ってきましたが、他にも完全に自立をしてもらうために当会で何ができるのか、ということをお話し合っていかなければなりません。

表 8-1 生活保護申請同伴 結果

	救護施設	就労支援	就職	サポート なんもさ	アパート	病院	不受理	合計
2005 年度	22 人	11 人	0 人	7 人	11 人	2 人	5 人	58 人
2006 年度	8 人	7 人	3 人	7 人	6 人	0 人	0 人	31 人

## 9. 會計報告

省略

## 10. 来年度にむけて

北海道の労働と福祉を考える会が活動が続ける中で、「野宿者に対して何ができるのか」に関して言えば、それに対する解答は増えてきました。例えば、住居の確保であったり、仕事に就いたり、生活保護を受けたりすることなどは、最初のころと比べてとてもやりやすくなりました。それは、活動が続けてきた上で自然と積み重なってきたノウハウや、支援の輪が広がってきたおかげ等からでしょう。

しかし「労福会が何をするか」に関して、現在の運営体制上、容易に活動内容を増やすことはできません。学生が中心で活動している労福会では、毎年、人が入れ替わり、新しく活動に加わった人はまた一からはじめなくてはならないのです。常に新しくなるという意味では、マンネリに陥らず、常に新鮮に考える活動ができ、運営するスタッフにとってはよい経験になるのでよいともいえます。ただ、やはり継続して活動していくという点からみると困難な体制で、先代と似たような活動を重ねるのが精一杯なところが現状です。今後、できることが増え、支援のネットワークも構築されてきた中で、労福会としては何を中心に取り組み、新しいことを実践できるかが重要になることでしょう。

また、野宿者の支援だけでは十分でないことも活動を通じて分かってきました。一度脱路上を果たしても、何か問題があつて再び野宿者になってしまう人は少なくありません。今年度は、居宅生活者に聞き取り調査を行ったり何度か手紙を出す程度で、実質的な支援まで踏み切ることはできませんでした。来年度以降、労福会のできる範囲で再び野宿者にならないために、どのような支援をしていけるのか、さらに深く考えていく必要があります。

## 11. 私と労福会

金子 倫大(北星学園大学 4年)

本年度は、大学の卒業論文の作成や他の社会活動へも関わっていたこともあり、昨年度以上に労福の活動に参加できなかった。知り合いの高校生を連れて炊き出しに参加したくらいで、今年の労福の活動の各々を取り上げてその是非を書き連ねる資格は私にはない。従って、昨年度から労福に関わって感じたことを含め、あくまで私個人の思いを記すことにしたい。

私が労福の活動に参加してみようと決意した大きな理由は、「興味」であった。それは、少しでも寒いとタクシーを拾って帰りたくなってしまふようなこの厳寒の地で、いかにして路上で生活ができるのか、なぜそのような生活をしないではいけなくなったのかという性質のもので、決して「路上で生活を営む人に救いの手を差し伸べたい」などといった、大それたものでも、格好良いものでもない。しかし、実際に夜回りや炊き出しに参加し、路上で生活をする彼らと話をしていると、生きる力を感じる。生き抜こうという決意を感じる。そしてなぜか、温もりも感じるのである。興味本位で参加し始めた労福の活動から、私は大切なことを2つ教わったと思っている。

ひとつは、「一生懸命生きる」ということである。私は昔から友人などに「アツイ男だ」などとバカにされてきたが、逆に私はそいつらに、自分の人生アツく生きなくてどう生きるのだと問いたくなる。人生を諦めたかのような顔つきをして適当な仕事をする人間が私は大嫌いである。そういうヤツには間違いなく私は食ってかかる。すぐに「わからない」を連発するバイト先の中学生や高校生、自分の人生のために勉強するのに1秒も考えもしないで諦めるその根性が許せないのだよ。私は労福の活動に参加してから、よく中学生たちに、札幌の路上生活者のことを話すようになった。物騒なこの札幌で、危険と隣り合わせになりながら路上で生活することは、並大抵の根気ではつとまらない。必死で生きるとはそういうことではないかと話す。この話と私の剣幕が功を奏したのか、彼ら彼女らは以後、「わからない」を発してはいない。路上で懸命に生きる彼らの姿を、いわば「普通に」生活し、賃金を得ている我々こそがしっかり学ぶべきである。私もこれからの人生、周りから何と言われようと自分の信念を強すぎるくらい確固と持ち、死ぬ気で生きていこうと覚悟している。

もうひとつは、「お節介でいい」ということである。そもそも人間関係など、お節介な者同士が言ってみれば勝手なことばかりし合うからこそ円滑に、かつ相手を信頼して成り立っているものである。語弊を恐れずに言えば、ボランティア活動もこの性質に含有されるものであろう。しかしどうにも、地域や社会を見渡せば、「お節介さ」が減ってきていることは明らかである。同じマンションに住んでいながら、すれ違う子どもに挨拶すらできない親世代。「アンタらバカでないの?」と言いたくなる。だから子どもが挨拶をしなくなる、

大人を信用できなくなる、安心できるところがなくて非行に走る、こんな簡単なことがどうしてわからないのか。いや、わかっているのかもしれない。この現実を目を合わせたくないのかもしれない。確かに腰パンや超ミニスカートの連中に挨拶をするのは勇気がいる。睨みをきかせて暴言でも吐いてこられたらどうしようかという不安もよぎる。だが、頑張ってこちらから話しかけてみると、その外見とは180度違う真っ直ぐな返事に、どれだけ癒されることか。労福の活動も、全く同様のことが言えるであろう。夜回りなどでは、中には労福との関わりを持ちたくないという人にも出会う。コーヒーを差し出したら「いらん」と言われたこともある。それはそれで構わないのである。大事なことは、それでも私たちが彼を気にかけることであろう。相手がこちらをどれだけ拒んでも、その存在を頭の片隅に常に入れておくことであろう。残念ながら、現在の地域はこれを忘れてしまっている。私は、労福での活動は勿論のこと、子どもたちに対してもどんなにウザがられようと、周囲に対してもどれだけ嫌味を言われようと、お節介りに生きていこうと思っている。

労福の活動は、私にこれらのことを教えてくれた。現在の社会に忘れられている多くの要素が、全て備わっている労福は、本当に温かく、素晴らしいと心底感じている。来年度以降私は、仕事をしながら更に社会活動を既に3つ以上掛け持つことが決まっている。恐らく夜回りには全く参加できなくなるであろうし、気が短い私は仕事や他の社会活動も、忙しくて投げ出したくなることも多々あると想像できる。しかし労福から教わったことを、どこかで思い出していきたいと心から思うところである。大切なことを教示してくれた「北海道の労働と福祉を考える会」に、最大の敬愛をこめてお礼を述べ、学生ボランティアの立場を卒業させていただくことにしたい。

### 楠 高志（札幌司法書士会）

昨年は、代表の椎名先生が亡くなるという、大きな出来事がありました。元気なうちに、お会いしておけばよかったのに、と悔やまれます。去年開かれた勉強会の時に、会の今までの歴史を物語る資料を、南部さんに頂きました。その中の、2003年3月2日付けの道新に載った椎名助教授（当時）の記事を、時々読み返しています。引用します。

『現役の労働者たちはますます失業への恐怖におびえ、会社の言うなりになる傾向があります。労働組合も直接の課題に追われています。わが身だけを守ろうとしても守り切れないことが分かれば、ホームレス問題をもっと考えるようになると思うのですが』

私は、高校を卒業した後、アルバイトを除いて今まで長く在籍した会社は2社で、資格試験の勉強のため自分から退職しました。大学に通学した事が無いので、労福会の勉強会や会議の時に、大手を振って大学構内に入れるので、うれしくなります。

それはさておき、後の方の倉庫会社は、職安（当時ハローワークという言葉は無かった）

の紹介で、身分は契約社員、1年ごとの更新でした。給与も時給計算で、正社員とは格差がありました。そのかわり、正社員よりは早く退社できるので、その時間を勉強に充てようと考えました。ですが、残業を頼まれればむげに断ることもできず、そのうちに正社員と同様に業務終了まで居るようになり、勉強の成果も上がらなかったため、2年後に思いきって退職しました。

とは言っても働かなければ生活していけないので、手持ちの現金が少なくなるとアルバイトを探してする不安定な生活をしていました。アルバイトでも、慣れた仕事のほうがストレスが少ないので、そのうちに先の倉庫会社に短期のバイトをするようになりました。

そのときの身分は派遣社員、別の人が立ち上げた会社に所属して、倉庫に派遣される形です。以前と仕事の内容は変わらないまま、給与は3分の2になりました。そのような形態にしたのは、(倉庫会社の)上司の要請に従ったからです。

この話を聞いて、冷たい会社だと感じるのは、ちょっと違うと思います。これは現状です。むしろ私は恵まれていると感じています。なぜなら、自分の希望で退社したわけで、問題が無ければ定年まで(給与はともかく)雇用してくれました。結局、試験合格後も2年ほど倉庫で仕事をし、3度目の退職の後、今はなんとか本業で生活できるようになりましたが、仕事柄、自分よりはるかに厳しい労働状況に置かれている人達に多く出会います。

一般的には、会社の在籍出向命令には原則従わなければならないが、一方、『転籍』は新たな会社との雇用契約ですから、本人が同意しなければできないのですが、前出の椎名先生の言葉のように、現実には給与が少なくなってもやむなく会社に従う人が多いと思います。同じ仕事をしているのだから同じ給与を払うべきというのは正論ですが、それが実現できるかどうかは別の問題です。

### 佐藤 真愛 (北海道大学水産学部 1年)

私が労福会に参加するようになったのは、去年の6月頃だったと思います。大学入学後、今年こそ積極的になろうと思っていた私は、クラスで学園祭の企画代表をやりました。企画代表になったは良いものの、会議会議でサークルの説明会などに行けず、完全にサークル勧誘の波に乗り遅れてしまいました。さらに、唯一見学に行ったサークルでは、あまりのテンションの高さについて行けず、少々サークル恐怖症になってしまいました。

学園祭も無事終わり、これからどうしようかなと思っていた矢先、友人に労福会に誘われました。元々、人のために動くのが嫌いではなかったため、案外すんなり入ることになりました。こんな感じで、特に興味があったわけでもなく、深い考えがあったわけでもなく、なんとなく入ったのです。

夜回りや炊き出しに参加していると、いろいろな人たちに出会うことができました。大学が違ったり、年齢層が違ったり、他のサークルではないような出会いでした。そして、

みんなそれぞれホームレス問題についてきちんと自分なりの考えをもっていました。それなのに私は、未だに自分の考えがまとめられずにいます。おそらく、積極性が足りなかったんだと思います。なので、来年度は少しだけ積極性を大事にして、自分の信念みたいなものを見つけ出せばなと思っています。

キャンパス移動まであと半年しかありませんが、今後とも宜しくお願いいたします。

### 世良 迪夫（北海道大学工学部 3年）

いやはや正直なところ、今年度も綱渡りな運営でよく1年持ったものだと思います。そして、来年・再来年度あたりは怪しいのではないのかとも思うのです。少なくとも来年度の始めのほうの縄は今年度より細いのは確実です。そして、手にする重りは時間が経つにつれて更に手ごたえのあるものになるでしょう。

今年度の他の人達の「私と労福会」を読んでもみると、来年度から人がとってても足りなくなって困りそうだなーという話がけっこうあって、どうにも似通った話ばかりになってしまっはつまらないので、来年度以降はこんな楽しみがあるというようなことを書くことにしましょう。

来年度からは代表・副代表が入れ替わり、昔から居るメンバーも就職等の関係で別の道を歩むようになり、とにかく活動する人達がほとんど新しくなってしまいます。もちろん、今までも川が流れるような感じで人が出入りしていましたが、今年度から来年度あたりにかけては滝のように勢いよく人が入れ替わっています。人が新しくなれば会もそれだけ新しくなるはずで、どうなってしまうんだらう感でワクワクしてしまいます。

それから、僕が労福会に関わる上で一番楽しいとおもっているのが、いろいろな人に出会えることです。人というのはおじさんばかり、ボランティアばかりで。それぞれ思想や性格や好みなど全然違う人が集まるのですが、労福という枠の中に居る以上、出会える人にある程度の偏りというのもあって、何故だかここで出会える人達というのは妙に居心地がよいのです。何故だかは未だよくわかっていませんが、それはともかく来年度は人手が少ない以上、人集めには必死になること間違いなしで、どんな新しい人にたくさん出会えるのかたいへん楽しみなのです。

### 寺嶋 祐一（労福会 OB）

3年前の夏、炊き出しの場で初めて散髪を実施することとなった。事務局長の安部薫道さんと私はこの初めての試みを成功させるべく準備に奔走していた。

7月の金曜日の夕方のことだった。安部事務局長と私はサッポロファクトリーにある1000円ショップへ買い出しに行った。1000円ショップには、浴衣姿の若い女性やカップ

ル達大勢いた。皆、楽しそうである。そう、今日は豊平川の花火大会の日だった。彼女達は花火大会に備えて団扇や飲み物を用意していたのである。その光景を目にした瞬間、私はふと我に帰った。「ああ、俺はなぜ今日という日にわざわざ100円のハサミを買いにきているのだろう」と思った。安部事務局長も同じことを考えていたらしく「寺嶋くん、今日花火の日やんなあ」と得意の香川弁で力なく呟いていた。

すっかり意気消沈した二人はサッポロファクトリーを後にし、駅前の薬局へ向かった。「マキロンジェット」を購入するためだ。理容師さん曰く「マキロンのような消毒液は絶対に必要。できれば噴射式の方が良い」とのことだった。しかし、このマキロンジェットいくら探しても見つからない。どこの店を尋ねても「うちには置いていない」の一点張りである。だんだんとマキロンジェットなどというものが実在するのかどうか疑わしく感じられるようになった。そうこうしているうちに、気がつくやうに駅前通りは花火大会へ向かう人達で溢れていた。豊平川方面へ向かうカップル達の視界に、私達二人は映っていない。しかし、私達二人には幸せそうに歩くカップル達の姿しか目に入らなかった。二人の苛立ちと言いやうのない虚しさはピークに達し、マキロンジェットを諦めることにした。すっかり正気を失った事務局長が「寺嶋くん、もうええやん。僕と一緒に花火いこうよ」などと言いだした。私は心の底からげんなりした。

買い出しを終え、疲れきった二人は夕食を共にすることにした。当然、花火の音が聞こえない店で、である。「せっかくだから誰か他の人も誘おう」という話になった。誰なら来てくれるだろうかと考えると、自ずと一人の先輩の顔が目には浮かんだ。ほどなくして、私達二人が食事をしている大衆中華料理屋に南部葵先輩が駆けつけてくれた。3人で飲んだビールは意外と旨かったような気がした。

### 寺林 泰亨(北星学園大学4年)

今年は、就職活動などが忙しく、全く労福に参加することはできませんでした。

そのため、去年とボランティアのメンバーも変わっているかもしれませんが、これまでの参加に対して、色々なアドバイスを下さったことや、コミュニケーションを取って下さったメンバーの皆さんに感謝したいと思っております。ありがとうございました。

私は、春からは本州のほうへ出て就職をすることになりました。知らない土地での生活は、好奇心がある反面で寂しさもあります。落ち込んだときには、炊き出しに来てくれる人たちの気さくさを思い出し、ボランティアのメンバーの皆さんの優しさを思い出したいと思います。

炊き出しなどの度に休暇を取って、札幌に戻ってくるわけには行かないので、なかなかまた活動に参加させていただくことは難しいのですが、たまたま都合がついて参加させていただいた時には、また元気な労福のメンバーの皆さんやホームレスの人たちに、力をも

raitai to omotte orimasu.

本州から、これからも応援しております。ありがとうございました。

### 中村 ちひろ（北海道大学教育学部 4年）

労福会も早いものでもう卒業となってしまいました。あまり熱心に参加してもいなかったし、皆さんには色々ご迷惑もおかけしたと思いますが、見捨てず仲間に入れて頂いてどうもありがとうございました。労福会に参加する中で沢山のことを勉強できたし、自分にとってもとてもプラスになる経験ができたと思います。この会に入らなければ、実際におじさんたちと接する機会も一生なかったかもしれないし、そしてなにより会の皆に会えることもなかったと思うと、参加するようになって本当に良かったなと思います。

何かを継続してやっていくということは本当に大変で難しいことだなと、労福に参加する中でしみじみと思いましたが、労福会は貴重な存在だと思うのでこれからも頑張っけていってほしいと思います。私も、この会で学んだことを活かして、社会に出てからも早く一人前になれるよう頑張ります。これからも陰ながら応援しています。

### 中山 治光（北星学園大学 4年）

#### 3月2日の夜回り

3月2日の夜回りに参加させていただきました。この日出会った野宿者は顔を合わせたことがある方がほとんどでした。そんな中、初めて会った男性野宿者がいたのですが、話をしていくうちに、「自分の行く所行く所で必ず嫌がらせをする人が現れる」と話し出しました。その人の話を聞いていくうちに、統合失調症ではないかと思い始めました。そして、夜回り同行の方と「精神的に病んでいるかもしれないですね」と話しながら、こんな時どうやってこの男性を医師につなげていけばいいのかと思いました。

今年の労福会では、司法書士のみなさんの参加が法的側面からの大きな力になり、野宿者の生活保護受給に成果をもたらしたのではないかと思います。福祉の分野では、困難を抱えた人と出会ったとき、「援助者」はできることできないことを見定め、できないことについてその人の困難解決のためにふさわしい役割や力量をもつ機関あるいは人につなげていくということがいわれます。

ぼくは、夜回りの次の日会った友人に困難を抱えた野宿者を医師につなげるにはどうしたらいいかと相談をしました。友人は先ず男性野宿者は統合失調症とまではいえないので

はないかと思うと、言いました。続けて、男性野宿者が孤立して追い詰められた状況になっているから「自分のいる場所に嫌がらせをする人が現れる」という気持ちをもつに至ったのではないか。だから、夜回りで話をする人がその人がまわりとの関係が切れてはいないと思えるところにつながっていくという意味で、大切なことではないのかと話してくれました。友人の話聞きながら、夜回りで話をするこの意味を思いました。そして、自分にもあった八方塞がりの体験を思い浮かべていました。今年は、労福会の活動に数回しか関ることができず、メーリングリストを読ませていただく毎日でした。

### 成田 允子（市民ボランティア）

私は大通り地下街を通勤経路としていますが、最近とみに目立つのは、路上生活者を意識した書面による退去強要、荷物の撤去強要と警備員の多さです。（少しでも寝そべっていたりするとすぐ警備員が飛んでくると路上生活者は言っています。）

さらに暖房がある場所（ウィンズや地下街出入り口など）でも、常にドアは開け放たれ、明らかに長時間滞在できないようにする意図が見え見えです。

地下街など本来人が居住するには適切ではない場所において、少なからぬ人々が居住(?)・長時間滞在せざるを得ないのは、憲法および生活保護法により「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を保障すべき義務を負う国・地方自治体が、その責務を適切に果たしていないからです。

日本国憲法は、すべての人が自由に自分の幸福を追求する権利を保障し、その前提条件としてすべての人に健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を保障しています。

しかし、明らかに健康で文化的な最低限度の生活水準をはるかに下回る生活状況にありながら、生活保護など法的保障から排除され、さらに、かろうじて見つけた居場所からさえ、強制的に排除されている状況です。

また生活保護受給者となっても、保護と引き換えに一切のプライバシーを奪われ、日常的な監視の目に晒され、ケースワーカーや民生委員の恣意的支配に従うことを強要されている状況です。

こうした状況に耐えることを強いられてきた人達が、限界ぎりぎりの中からあげた声が「自己決定」への叫びで、「保護はいらない」だと思われま。

これに対して伝統的自立観念論者たち（政治家・官僚や一部知識人）は、「被保護者自身が保護よりも自己決定と言っている。自立への意欲を持ち、努力することが人間の証なのだ、人間の尊厳の根拠なのだ。保護よりも自立を！」といい、役所もそれに従っていません。

他者の援助や保護を受けながらの「自立・自律」という一見矛盾した考え方が、今求められていると思われま。まだ少数派ではありますが障がい者の「自立・自律」と同様に考え

ると分かりやすいかもしれません。

自律・自立のために必要な援助や保護を請求しながら、保護を通じた恣意的支配には抵抗して、「自分らしい生活を営む」ことが誰にとってもより良い生活に繋がると思います。

そのためには、多くの人にこのような考え方を広める必要があります。

私は職場で努めて路上生活者のことを話題にするようにしています。(大阪のテントが強制撤去された事件・少年らが路上生活者を襲撃した事件、身近な地下街にいる路上生活者達が私に声を掛けてくれる内容「今日は寒いよ、今日はいつもより早い出勤だね」などのエピソード)

そのため、職場の人達は大通り駅近くにいる路上生活者の1人を「成田さんのボーイフレンド」と呼び、声は掛けないまでも「今日はパンを食べていた」「今日は寝ていた」などと関心の目を向け、報告してくれます。

私たちは1人では生きていけないことを知りながら、異質なものを排除する傾向があります。「自立・自律」には、いろいろな形があることを理解し、誰もが「自分らしい生活を営む」ことが出来るようにお互いを知り、補い、援助し合うことが求められていると思われれます。

私は労福会を通して多くの人と知り合い、交流を重ねる中で生かされていることを実感する毎日です。この会が「もう路上生活者が1人もいなくなったので解散！」という日が来るまで、新入者を迎えながら活動が存続できることを願っています。

## 南部 葵 (労福会庶務)

### いつまでも、「労福」スタイル

これまでたくさんの方のことを労福会から教わった。

心の底から苦しいときにも助けてもらった。

たくさん与えてくれたこの労福会に、せめてもの恩返しがあった…。

なにかものごとを新しくはじめたとき、人はよく疑問や反対の声をあげる。私が、大学1年のとき、語学の必修授業の前にビラを配り、発足したばかりの労福会に参加してくれる人を募集していた。不器用で、失敗することを予想しない私だったから、ただひたすら…できた。「きれいごとと言って嫌だ」「そんなことやってうまくいくわけがない。考えが甘いんだよ」。周囲にそう言われた。クラス全員に告白しなければ、そんな言われ方をしなくてもすんだ。でも、はじめからそういう逃げ越しの姿勢で臨むことが嫌いだった。同じことは、当事者である野宿者からも、公開講座で市民の人たちからも、区役所でのケースワーカーからもさんざん言われ続けた。「お前らのしていることは、ただの自己満足だ」と。私はいつも心の中で思っていた。「支援活動をしていて満足することはない」って。先入観だ

けで疑うことなく「きれいごと」とたくさんの人たちが異口同音に言ってきた。全体的にそういう空気だった。あたかも何かに魔法でもかけられたかのようだった。

「君たちがやろうとしていることが何を目的としているのかわからない。生活保護につなげるだけなら、役所がやっていることと同じじゃないか」。2001年に私が事務局長になって、はじめての会議でつっこまれた言葉だ。反論できなかった。ほろ苦いデビューだった。感じていることがうまく言葉にならない。悔しくて、いろんな先生のところへ自分の気持ちを正直にぶつけてまわった。ある日「野宿者とのつきあいが足りなすぎるからなんじゃないの」。そう言われて、ハッと思った。「野宿者に付き添うと一緒に辛い思いをしなければならぬ」という意見もあったが、それも含めて全て真実だ。私たちの強みは、先入観だけで何かを話しているのではない、事実を見てきているということ、それしかないのだと。

携帯が鳴る。「あ～あ、また公衆電話だよ」。そんなときは、ほぼ間違えなく野宿者からだ。本当に、本当にしょうもない用事で、呼び出しがかかる。こんなこといつまで続けるのだろうか。行き詰まりかけると、不思議と転機は訪れるものだ。それは、ある野宿者との出会い。嘘をつき、事件を起こし拘置所には入れられ、もらったお金は遣い込む。世間では「どうしようもない」というレッテルが貼られる典型かもしれない。正直、「困った・・・」と思った。しかし、言葉ひとつで何かが変わることがある。付き合っただけで話をいくなかで、次第にいいところが少しずつ現れてきて、人間的に変化していく様子が手にとるように見えてきた。労福会との出会いがきっかけとなって、他人から信用されることもでてきた。そうすると、悪いところが徐々に小さくなっていく。こういうことってあるんだな、労福会のやっていることって、そういうことだったのかなど。経済的な部分ではなく、精神的な部分での応援団。心のどこかで引っかかっていたものが、ようやく長かった魔法が、取り除けた気分だった。「口で説明するのではなく、足で説明できた」。いかにも労福的で、そんな表現がぴったりとあてはまる。

かといって、こういうケースと出会うことは、決して多くはない。だから、今すぐに労福会の意義を自分の言葉で話せるようにならなくても、いいんだと思う。そして、労福会で頑張っているメンバーの多くは、仮に私のような経験がなくても、モチベーションを維持して活動を続けなければならないのだから、「よくやっているな」と自分を褒めるくらいで、いいんだと思う。たとえ、誰かに労をねぎらわれることがなかったとしても。

労福会には、様々なメンバーが様々な事情をかかえているから、関わり方も一様ではない。買出しに行く人、車を出してくれる人、夜回りでいつも走ってやってくる人・・・。たくさんの方の縁の下での力持ちによって労福会が支えられていることで、はじめて事務局の運営

が成り立つ。一部のメンバーだけがどんなに頑張ったとしても、活動は回らない。だから、貢献度に上下の差はない。それでも、普段、影で動いてくれるメンバーに、その気持ちを言葉にあらわす機会はなかなかないのだが、感謝の思いだけはいつだって忘れてはいけない。ただ、「たいしたことしてないよ」という感じで、自分の役割を人知れずきっちりこなす。それも労福会らしくて悪くはない。

きっと、こういうスタイルが、私の生き方そのものにも少なくない影響をおよぼしはじめているのだと、最近思う。

### 長谷川喜哉（北海道大学農学部 2 年）

唐突に変なことを書きますが、私は、国内外を問わず旅行が好きです。というか、知らない場所を探検したり、見たことのないものを見たりして、新しいものを発見することが好きです。だから、バイトをして旅行資金をためたり、自転車や車であちこち徘徊したりしています。また、食べることも好きです。だから、おいしい店の情報は常に探しているし、大学で食品加工工学を勉強しています。

そして、何より人と話すことが大好きです。これが、飽きっぽい私が一年半も労福の活動を続けている理由であると思います。例えば、夜回りでは、ホームレスのおじさんであっても、労福のスタッフとして参加している人であっても、年齢も性格もいままで歩んできた人生もまったく異なる様々な人と話す機会があります。ホームレスのおじさんの中には、競馬が好きな人がいます。夜回りで会うたびに最近の馬の調子を話してくれます。毎日、時間ごとに札幌市内あちこちの温度計を見て記録している人もいます。夜回りで会うたびに、最近の気温の変動について事細かに解説してくれます。過去にトラックの運転手をしていた人もいます。夜回りで会うと、北から南まであちこち走り回って大変なトラック業界のことを、自分の昔話を絡めながら話してくれます。私は、競馬にも気温にもトラック業界のことにも、特段興味はありませんが、この人たちの話を聞いてうんうんとうなずいている時間がとても楽しいのです。でも、このようにいろいろ話せるようになるまでは、長い時間がかかります。はじめて会ったときは、いきなり話しかけてきた変な学生にいろいろ話そうとは誰しも思わないはずですが、それが、夜回りで何度か顔を合わせるうちにいろいろな話をしてくれるようになる人も中にはいます。その瞬間はとてもうれしいものです。また、スタッフの中には様々な世代、職業の人、同じ世代の学生であっても学校も学部も違う人など本当に多種多様な人がいます。このような人たちとも夜回りをしながらいろいろなことを話します。野宿者の問題について、生活保護のことについてなど難しい話しをすることもありますし、全然関係のないくだらない話をすることもあります。私はこんな夜回りが好きです。だから、金曜日の 20 時には大通に足を運ぶのかなと思います。

なんだか変な文になってしまいましたが、労福の活動に参加して、いろいろな人と様々

なことを話すことは、本当に多くのことを教えられ、考えさせられます。来年度も夜回りをはじめ、労福の活動を地道に楽しみながらやっていきたいと思います。

### 平間 愛（北海道大学水産学部 1 年）

私は今年入学したばかりの一年生です。

労福会の活動も、今年が初めてです。きっかけとなったのは入学式の時大量にもらったビラの中の素朴な一枚、『真冬の札幌にホームレスがいることを想像できますか？』という文字が目飛び込んできました。

自分は千葉出身なので札幌の寒さなどその当時は全く未知のもでしたが、それでも、例えば家があろうと決して楽ではないだろうということぐらい容易に想像がつかしました。そしてその中路上で暮らす人がいる。一体現場はどうなっているんだろう。そう思ってこのサークルの活動に参加してみることに決めました。

始めのうちはただ必死になって動きについていだけでしたが慣れるに従って様々な問題が私の目にも見えるようになりました。それは理想と現実のいちごっこのようなもので、綺麗な答を出すことは何よりも難しいであろう諸々の問題に労福は立ち向かおうとしていました。たくさん問題を内に抱えながら。

その多くの問題の中でも最も私たち一年生の身に一番差し迫ったものとして、深刻な人員不足が挙げられます。裏を返せば私のような日の浅い人間の意見もきちんと聞いてもらえるということにつながるのですが、そう楽観してもらえません。今一年生は私と佐藤さんの二人ですが、双方北大水産学部にて在籍しています。水産学部は二年次の夏から授業が函館キャンパスで行われるようになるためそちらへ引っ越さなければいけません。つまり、労福から私たちの代がいなくなります。

今後の会の成り行きを考えるとこれは深刻なことですが、私たち一年生にも何とかできる数少ない問題でもあります。四月に新入生歓迎に精を出して函館引退するまでに私たちの跡をついでくれるような後輩を育てることが、労福での最後の仕事になり、また、一番の置き土産になるのではないかと思います。

### 真鍋 千賀子（市民ボランティア）

毎年、「私と労福会」を書くこの時期は、わたしには自分をより深く見つめる時、見つめ直す時となっています。活動の中で、自分はどうしてきたか。私は七年前に、北の札幌に来て、労福会に関わることになりました。貴重なかわり、交わりの日々、おじさんのまずしさ、或は貧しい頑固さ、貧しいねじくれた生き方、或は彼らの真っ直ぐな心、その時の瞬時を全力で生きているおじさんが、どうしてずるい時があるのか。真剣に求めれば、

支援に着くのに、なぜ逃げるのだろうか、とか、この不思議を思いは解決しないまま、労福のやり方、私のおじさんへの接触の未熟さの為に、彼らに近づいていくことができないのだと思ってしまって、孤独感を深めたりします。

一生懸命の学生さんたちが、無垢でよりどころのないおじさんが、いつときの炊き出しをむさぼっている前で軽やかに談笑しているのを見ると、空しさと寂寥感がひとりこみあげて来ます。ああ、私たちとおじさんの距離は遠い、と。

### 聖書のことば

その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベデスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。その中に大勢の病人、盲人、足なえ、やせ衰えたものが伏せていた。そこに、三十六年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは、彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことを知って、彼に言われた。

「よくなりたいか」

病人は答えた。

「主よ、私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もう他の人が先に降りていくのです」

イエスは言われた。

「起きて、床を取り上げて歩きなさい」

すると、その人は、すぐに直って、床を取り上げて歩き出した。

このたとえ話をどう思いますか。おじさんに同伴する時、夜回りの時、おじさんとの交流の時、自分のことよりおじさんの幸せのために動こうとしてしまう傾きが私たちにはあります。他人から見たらオーバーワークに見えるだろうなとわかっている動きです。支援を必要としているおじさんが、隠したあえぎを聞いてしまうのです。声かけは、調査ではないし、彼らの悩みに同伴し、唯よりそい、自分の未経験さから、おじさんの就労への願いに答えられない時に、次の時間を置いて色々動いて、望みに答えようとする…。こういう気持ちにさせられてしまう。おじさんって、こういう社会のひずんだ裂け目で「一日一食」と言っているおじさんって、この貧しさって、何ものなのでしょう。

労福会は、いま一度紙の上から目をおじさんたちに上げて向けて、支援は法律の学習を裏付ける知識を学びながらも私たちも厚みのあるそして自然体の心境から支援をしていきたい。もっと迫力のある支援、もっと学力(?)のある支援に気づいていきたいと思う。

なぜ、自分が関わるのか、エネルギーを注ぐのか、行動するのかわかってくると思う。燃えている炎のような行動の核が、このような情熱と、澄んだ眼差し。愛。おじさんたちに向かい、ごろごろした心の中に入っていける支援の暖かい目があればいいと思っている。

### 忘れられない人

栄養失調で立てなくなり、ケースワーカーからどのように扱われたのかわからないおじさん。ある日、そのおじさんが亡くなったことを私は知った。おじさんとのつきあいは、エルムの時からである。エルムで焼酎を飲んで廃品を回収し、水曜日の夜一回私の持っていった鍋を楽しんでくれて、同志でけんかしたり仲直りしていたおじさんが亡くなった。餓死であった。

私はある日、おじさんの友達の電話で呼ばれて彼のアパートに行った。

エルムのおじさんは、全員、テントから退去させられて、救護施設経由で生活保護を受けアパートに入居してから、おじさんはアルコールに依存し、教会のバザーにきたとき買ったアリア像を置いて、何にもすがれず、飲み続けて体が弱っていた。

私が雪が降る日、アパートに着くと、うれしそうに笑った。足の踏み場のない部屋で、座布団をすすめられて、彼の様子を聞いた。大丈夫だろうか、危惧しながら、彼を見ながら部屋を見回し、生活が荒れすぎた様子を見てとった。早速、病院で診察してもらいましょう、とすすめた。彼は私の勧めに素直であった。友達のおじさんも、私を連れて行ったのは、私の勧めなら聞くからという訳であった。

その日は大雪だった。においのする彼を、友達と彼の肩につかませた（彼はもう立てなかったから）。タクシーを呼んでおいて、それに乗せて病院について診察を待っている間、彼の階上に住んでいる派手な金属をジャラジャラ胸や腕につけたおばさんが私たちを監視していた。彼女も生保受給者で、おじさんは彼女の管轄下の人間だったのです。彼女は途中で怒り出し、おじさんの財布から千円札三枚ムシリとってタクシーで乗って帰ってしまった。あら、おじさんの買い物は彼女がしているのだなと察した。

医者は栄養状態が悪い。たとえばアフリカの難民の子供より街のホームレスより悪い、と言った。この言葉は彼を傷つけた。一週間、薬を飲んでみて、それから入院と決まった。あと、彼を家に帰してから、地区の担当ケースワーカーに連絡し、事情を話した。訪問を増やすようにアドバイスした。

しかし、彼は入院もせず、一人で餓死してしまった。

二年前の六月十五日のことである。

私は心の入らないケースワーカーに連絡して、

「何丁目のSさんの係りはもう配置変えなさっているわよね。しかし、そこで一人おじさんが餓死していることをご存知ですか」と聞いてみた。「ケースワーカーさんは一人一人を見ませんよね。申し送りはあったんですか？調べられるでしょ」私はくどく、「見てくださるよう頼んだんですが」役人はしどろもどろだった。「一人の人間を訪問して欲しいんですよ」「人間のことばをかけて欲しいんですよ」「北区の保護課の課長さんはどなたですか」「もう、あやまっても彼は死んでしまいました」「今後に対応を生かして欲しいですね。声かけは、指導はマニュアルを越えて、自分の心をかけてやって欲しいですね」と。「課長さ

んに、こういういきさつがあったことを伝えて、ケースワーカー全員に注意を喚起して欲しい」「労福として新聞記者をよんだりしません、わたくしのほうも検討はいたします。気をつける筈のととても重要な点です」

気のどくに、窓口のこのケースワーカーの対応は、なさけないふるえ声で、課長に伝えます。自分らも気をつけてやっていきます、でした。電話をありがとうございました、でした。

私たちは、夜回り、同伴のとき、炊き出しの時に、ひとりの人間に向き合います。腹の底からの覚悟が求められるような気がします。口先の対応は、おじさんを自立させないです。

### 山本 侑（北海道大学薬学部 4 年）

世良事務局長、そして今年度の会の活動を引っ張っていたみなさん、本当にお疲れ様でした！そしてごめんなさい m(\_\_\_\_)m 副事務局長（もはやネタになってますね）という立場だったのですが、今年度は全くと言っていいほど活動に参加出来なかったために、みなさんには迷惑をお掛けしたと思っています。本当、申し訳ないです。

さて、という訳でこれから書く内容は、あくまで僕が ML やメンバーから聞いた話から感じた事なので、凄く的外れなものになるかもしれません。もしそうだったらごめんなさい（あ、また謝ってしまいました）。

今年度は、会としての活動がとても難しい段階にきていたのではないのでしょうか。保護申請の役所の対応もこれから厳しくなってきたし、一度保護を受けてもまた再野宿になってしまう方は相変わらずいっぱいいるし、会として居宅者支援の必要性も感じているのになかなか動き出せないし、おじさんが札幌中心から郊外に移動したのでは？という説もあったのに結局よくわからないし、おまけに人数調査をやってみれば野宿者が 100 人以上！！いるし（これも数える方法がうまくいったのか、本当に増えたのかよくわかりませんよね・・・沢山いる事は間違いないでしょうが）

でも・・・今後の活動を考えた時、実は一番の問題は、役所との関係をどうするかとか、居宅者支援をやるのかとか、炊き出しをやるのかやらないのかとか、そんなことではなく・・・・・・・・・・・・・・・・人手不足！！ではないのでしょうか（笑）。それは会発足当時からだろ、とツッコミを入れられそうですが、多分、今年度の人手不足は相当のものだったんじゃないかと（会議出てないお前が言うなよ、というツッコミはなしでお願いします）。「会議に遅れていたら、事務局長が一人で待っていた」だの、「今日の会議は 3 人だった」だのを何回も耳にしましたし、僕が学校祭で店を少し手伝った時も凄くそれを感じました。いや、それなのに会の活動を例年通り回していた世良君は本当に凄くと思うし、それをサポートしていた数人のメンバーも本当にお疲れ様！と言いたいです。頭が上がりま

せん。やっぱり少人数で会議をやってもモチベーションが上がらないし、そしたらいいアイデアも出てこないし、なによりやってて楽しくない気がしません？そもそも居宅支援やら何やらも結局人手がいなければ話が進まないと思いますし。今労福会に必要なものは、人手（とそこから生まれる活気）なのではないでしょうか。そういう意味では、今年度の活動で、実は一番よかったのは北星学園の学生さん達との繋がりが出来てきたことじゃないのかな～と個人的には思っています。繰り返しになりますが、そんな中で立派に事務局長をやり遂げた世良君、それをサポートした皆さん、本当にお疲れ様でした。

というわけで、次の春の新入生勧誘は地味に凄く大事だと思います。「どうせ1人か2人だろ」と諦めないで、力を入れて労福の魅力をアピールしてみてもどうでしょうか。

## 北海道の労働と福祉を考える会 次期役員紹介

顧問	杉村 宏	(法政大学現代福祉学部教授)
代表	木下 武徳	(北星学園大学社会福祉学部講師)
副代表	嶋田 佳広	(札幌学院大学法学部講師)
	川村 雅則	(北海学園大学経済学部講師)

## 事務局幹部

小野 貴章	(北海道大学経済学部)
今 加菜実	(北星学園大学社会福祉学部)
佐藤 真愛	(北海道大学水産学部)
塩崎 満子	(市民ボランティア)
世良 迪夫	(北海道大学工学部)
篠原 睦	(北海道大学教育学部)
高柳 晴香	(北海道大学教育学部)
中山 治光	(市民ボランティア)
成田 允子	(市民ボランティア)
長谷川 喜哉	(北海道大学農学部)
人見 泰弘	(北海道大学文学部)
平間 愛	(北海道大学水産学部)
眞鍋 千賀子	(市民ボランティア)
山本 侑	(北海道大学薬学部)